

TOPICS 震災を風化させない！ 強い決意で語り継ぐ 宮城・石巻発の「オンライン語り部活動」



上:石巻市にある「3.11みらいサポート」の事務所からWEB配信(写真中央の女性が語り部の高橋正子さん)。この日はNHK仙台の取材が入った。下左:語り部の高橋さん。下右:画面の向こうで、真剣に耳を傾ける生徒たち

石巻の体験談を、全国の小中高生へ生配信。1万人以上が視聴！

日赤宮城県支部が今年1月から取り組んでいる「東日本大震災から10年プロジェクト」。その企画の1つとして、震災の教訓を伝える公益社団法人「3.11みらいサポート」とタッグを組み、全国の青少年赤十字(JRC)に加盟する小中高生を対象にした「オンライン語り部活動」が実施されています。これは、宮城県石巻市の語り部8人が日替わりで、オンライン会議システムを使い、震災の経験や教訓を生配信するもの。1月13日から3月18日までの期間、計26回にわたり、のべ1万人以上が視聴します。

語り部の体験談を通じた震災の継承活動は、災害は今日も明日も自分の身に起こりうることだと子どもたちが「気づき」、どう行動するべきか「考え」、そのための備えとして「実行する」ための貴重な機会です。宮城県支部はこの取り組みによって、被災地から発信する「震災を絶対に風化させない」という思いを、災害から人々が守られる社会づくりにつなげたいと考えています。

プロジェクトに参加する8人の語り部は年齢も性別もさまざま。避難の判断を誤り、家ごと流され9日後に救出された高校生。逃げ遅れ津波のみ込まれた経験から肌身離さずラジオを持ち歩く男性。就職の決まっていた息子さんを津波で亡くした女性…。大切な家族や家を失ったつらい経験や、あの時できなかったこと・こうすればよかった…という後悔、そして、今を生きる大切さをそれぞれの実体験をもとに語ります。

津波に町ごとのまれ、帰る家を失った避難先の体験を写真の代わりに絵本で伝える

取材時の語り部は、自宅が津波により地区ごと流出してしまった高橋正子さん。甚大な被害を受けた自宅周辺の写真や地図を見せながら、自身や高校1年生だった息子さんの経験を話しました。

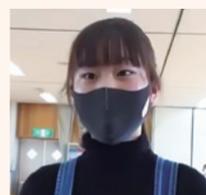
「あの日は春のようにとても暖かい日で、いつものように、朝、行ってきますと出かけたけれど、津波で自宅を流され、夕方には帰る家なくなっていました。また、その日は学校が休みで自宅にいるはずの息子と全く連絡が取れませんでした」

当時、息子さんは、お婆さんと一緒にお寺に避難した後、津波が迫るなか裏山に逃れ3日目に救助が来るまで80人の人達と山で野宿をしています。一緒に避難した人の中に、この経験をまとめ、絵本にした方がおり、今回は許可を頂いて高橋さんが読み聞かせました。

お寺の鐘をなべにして作ったお粥^{かゆ}を、皆で分けあい救助が来るまで乗り切った実話です。避難の時にカメラを持っている人はいなかったため、記憶を元に絵本は作成されました。

高橋さんは語りの最後に、帰ったら家族と今日の話をする事、そして「災害が起きたら命を守るスイッチを押す」という2つのお願いを伝えました。

視聴した「いすみ市立太東小学校」の6年生の感想



あらいみなみ
新井未南
さん

体験談を聞いたのは初めて。とても恐ろしい震災だと感じました。地域がぐちゃぐちゃになった写真を見て怖いと思ったけど、写真や図を使った説明がわかりやすかったです。私たちの学校も海が近く、もしも津波が来たら低学年の子たちを連れて逃げないといけないので、避難場所や避難方法をしっかり覚えておきたいです。



こしまみさき
小島湊
さん

高橋さんから高校1年生の息子さんがいると聞きました。避難したときのつらい経験を聞かせてもらったので、このことを知らない周りの人にも、伝えていかないと感じました。そして、僕も津波に備えて対策をしたいと思います。今日は家に帰ったら、高橋さんに話してもらったことを家族に詳しく話したいです。

絵本「なべになった鐘」(作・堀込光子、堀込巨)流された鐘で粥を作り、体を温めながら三日二晩のつらい野宿を乗り越えた実話
(※絵本は自費出版で販売中。詳細はFacebookで「なべになった鐘」で検索。本の収益は東日本大震災の震災遺児の支援活動に寄付されます)



データ提供: 堀込光子



高橋正子さんの自宅周辺。高橋さんの家は土台しか残っていません。 <写真提供: (公社) 3.11みらいサポート>